

第2回研究実践奨励賞



◆受賞のことは◆

限りなく近い隣で

岩田 真由美

(結城市役所子ども福祉課 / コミュニティ福祉学科 2002年卒業)

Dさんとの思い出を僅か2ページに詰め込んでから1年。みなさんにはどう伝わったの
だろうか、どのように感じられたのだろうかとずっと気になっていました。今回、奨励賞
という形でお返事を頂き、驚くと同時に大変嬉しく思っております。駄文にも関わらずお
読み頂いた方々、またご推薦下さった方々には、この場をお借りしまして深く感謝申し上
げます。

「相手の立場に立って支援する」と書きましたが、「相手が立っている場所の、限りなく
近い隣で寄り添う」といった方が、感覚的に近い気がしています。完全に相手と同じ立場
にはなれないし、わからないこともある。だからといって諦めるのではなく、また、支援
する側とされる側という向かい合った関係性を作るのでもなく、できるだけ近い場所から
同じ方向を向き、その人が何を見ているのか、どう感じているのか理解しようとする姿勢
が大切なのではないかと思います。

しかし、どんなに寄り添って相手を慮っているつもりでも、多かれ少なかれ自らの価値
観が影響するもの。だから自分が思っている“ふつう”とは何なのか、良し悪しの基準は
どこにあるのか、何が分かっているのかを分かっていないのかを考え、悩みながらやっ
ていくしかないのだと感じています。いろいろな選択肢がある中で、その人が選びとれるよ
うきちんと情報を伝え、どうするか一緒に悩み、迷い、歩んでいくことしかないのだろうと
思います。

私は決して優秀なソーシャルワーカーではありません。うまくいかないケースも多々あ
りますし、逃げ出したくなることだってあります。しかし、考えたり悩んだりすることが
できるうちは、この仕事を続けていく資格があるのではないかと思っています。だから
これからもこの仕事に携わっていきたいと思いますし、皆にも続けてほしいと切に願っ
ています。

この「まなびあい」が縁となって、多くの卒業生や学生が文字通りお互い学び合い、支
え合っていけたらいいなと心から思っています。同じ福祉を志した仲間であり、限りなく
近い隣にいる心の友として。